

THE
JAPAN
INTERIOR
DESIGNERS'
ASSOCIATION

住宅産業の方向

東京大学建築学科教授

工学博士 内田 祥哉氏

10月29日 午後6.00～9.00

共同通信ビル内ジェトロ大会議室

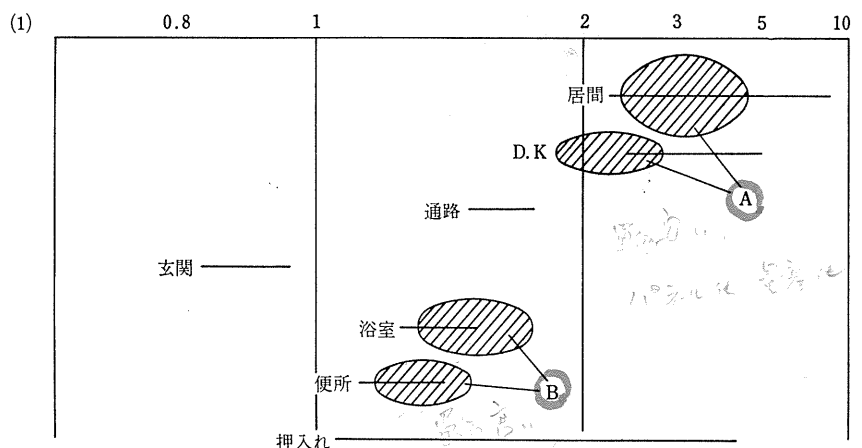
今日はプレハブの歴史的展開の用意をして来たのですが、モジュールの話もするように会員の方から頼まれましたし、又最近モジュールの話が再燃してきましたので、モジュールの問題を中心にサニタリーユニットや設備ユニット等の話をしたいと思います。それに付け加えて、サニタリーユニット／

と設備ユニットの概略とユニットに関して多少話をしたいと考えていますが、しかし今日の話はユニットの全てを網羅したものではないが、ユニットが、こんな具合になっているという概略に付いて申し上げようと思って居ります。

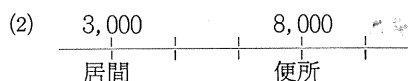
では建物の中でどういう物がユニット化されているのか？

住宅の中でどの部分をパネル化し、ユニット化したらよいのか？

スライド（原弘氏作図→下記は概略速記）



上図は住宅内における各空間の面積比である。Aはマスプロダクションに適しているところであり、Bはユニット化に適しているところである。



(2)図は㎡又は坪に対して掛る費用の居間と便所に対するものである。

便所は種々な要因から成り立っているわけで、腰に使う材料が他の壁材と違うとか、色々な部材を小さい面積で使用するの、各パーツは大変小さくなって来る。浴室も同じであり、押し入れや玄関に付いていうならば、玄関は広ければ別であるが、居間と便所に

掛る費用の中間になる。浴室も玄関と同じである。

(3)図

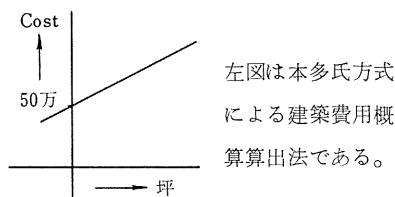
一種類のパネルでおおえる面積（単位㎡）

居室は安価になるものでなければならぬ。その為にはパネル化して量産化し、コストを低くする。便所の場合はパネル化しても各パーツが小さいので具合が悪い。D.K.も大変むずかしいが室としてはパネル化出来る分野に近い。玄関は中間である。押し入れに付いては、押し入れの形によってパネル化の方が優利の場合もユニット化の方がよい場合がある。

便所、浴室を作るのにどの位の費用が掛るか？

- 新入会員紹介・会員近況・編集後記 16
- 東南アジア巡って 14
- 談話室 11
- JID・東京支部新年例会 10
- リビングII討論会 5
- 住宅産業の方向 1

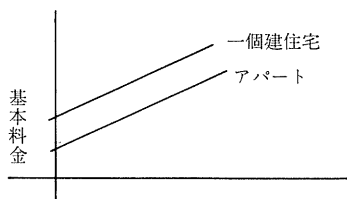
no.8 vol.47・48



$$50万 + 5万 \times \text{坪} = \text{建築費用}$$

建物の大小に関らず約50万の費用が基礎費用として掛る。基礎費用の内訳としては、建物に1つしかない物→例えば、電燈の引き込み、下水、上水、浄化槽、現場仮設費、申請費等であり、便所や風呂場は一建物に一つが常識であって、その便所や風呂場に基礎費用50万のうち約半分の25万円が掛るが、普通の部屋は5万×坪数となる。

プレハブ住宅の場合とか公団は各パーツで使われる数も多く、全てが量が多くなるので一個建住宅と異なる。つまり下図の如く基本費用が少くなる。

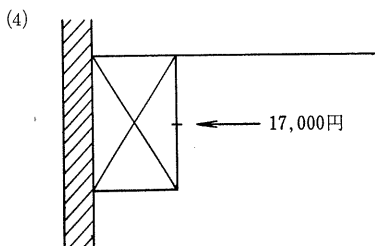


ユニット化は現場施行で面倒な事が多い。しかしユニット化という事からは、このような趨勢になるであろう。

押し入れは建物の面積が大きくなれば、押し入れの面積も広がる。

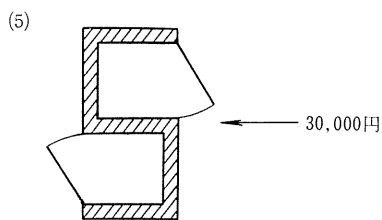
押し入れの価格に付いて

スライド



ユニット化は大変無理であり、ユニット化より、パネル化の方がよい。現実にはフスマでパネル化されている。

家具で3万円程度の物はデパートでないわけではない。そういう家具は押し入れより上等に出来上っているのに、こういう物をユニット化の方が良い。ユニット化して家具で仕切っても



よいのではない。建築の積算では、だいたい合う。

(6) 図

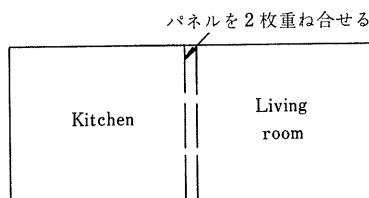
押し入れのばらつきから考えるとユニット化、パネル化の方がよい。

室内の間切りをどういようにパネル化したらよいのか？

住宅は違った部屋が集まって構成されている。どこの家でも同じ種類の部屋と部屋との間を同じ種類のパネルで間切ってみたらどうであろうか？

品川区に建設計画があり、ある程度考えてから実際には建設しなかったマンションの例でパネル化の面に関して説明してみると、マンション1棟に対して、大きいパネルは約432枚(パネルの巾は1mとして)、サニタリー、キッチンには48枚使う事になる。432枚という量は量産してもよい。高層建築を沢山作れば、サニタリー、キッチンの場合のような少ないロッドの種類の物でも多く使う事になるであろう。しかし現在の日本の場合は土地問題やその他の問題があり無理であろう。こういう種類の物は量産しない方がよい。サッシの例で考えてみると、100位作る場合は注文出来る。又、治具を作って作る事が可能である。1000位の単位になると、工具を作って作る事が出来、注文は自由になる。

間仕切に用いるパネルに付いて考えてみるならば、仕切るパネルを二枚に重ね合わせて両面パネルにして、各同種の部屋で使用するパネルを統一する。



これを使う部屋として、例えばBed-roomやLiving-roomがあり、これらを組み合わせると1900枚になる。一番多く使うもので1200枚—Bed-

room, 一番少い壁で300枚。パネル化出来るのはBed-roomであり、一方ユニット化出来るものはサニタリー(便所、浴室)である。

公団で部品化出来るものは、便所、戸、フスマやその他である。又、現在いくつかのパーツに別れているのをユニット化出来るであろうものは、物入れ、その他である。

大量生産パネル構造
パネル構造の場合の配管する場合はどうするかについて

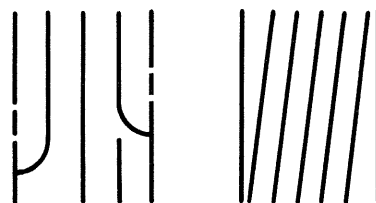
日本では壁に穴があけられ、したがって、配管のパイプは露出されている。ハンガリーではコンクリートの中にパイプが組み込まれている場合もあるが、穴があいた状態の場合もある。ソ連の場合は、便所と風呂場の中間に仕切りを付けている。最近ではヨーロッパ諸国でも便所と風呂場の中間に仕切りを取り付けられているようであり一住宅に、二つや三つの風呂場や便所を持つというような贅沢な設備をする事は少なくなりつつあると聞いている。

壁の中にパイプが埋め込められるに付いては多くの問題がある。

スライドで説明

下図は大量生産されるパネルの中に設けられるパイピングの例である。

(A)何階建でも2本



(B)10階建であれば10本必要

ダクト型は湯沸し器を組み込んだものである。

○チェコスロバキアの例(スライド説明)、豪華なユニットである。

○湯沸かし器が組み込まれている例(スライド)ダクトも組み込まれている。配管がコンクリートのパネルに埋め込まれている。

○フランスとスウェーデン(スカンスカセメント)がこの種の分野では早くから開発している。

○コンクリートキュービック

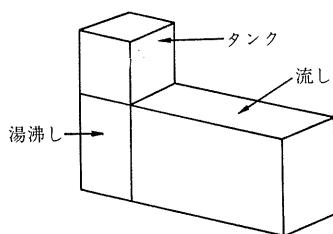
日本ではこのような種の物をパート

に使うということは大変少い。最近大成建設K. K. が作った物がある。

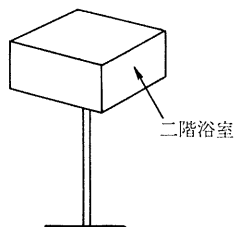
○プラスチック材、この中でF. R. P. (ポリエステル) は使いづらい材料である。つまり立体にして大きい型の物となると手作りしなければならないし、量産しても効果がない種の材料である。(スライド説明で、この場合F. R. P. で作られている中に配管が施されている例)

○露出されている(ハダカ)のユニット(スライド)配管のみを、アングルで骨組み(わくを組む)を行い、その中に設備を組み込む方法である。表面は自由に仕上げさせるシステムである。これはイタリアで使われている方法であるが、ノイトラもこの方法を用いている。この骨組みに組み込まれる設備としては、洗面用具や台所用品がある。

○イギリスの例(スライド)



○二階建のハダカのユニット



○ウォールコートとキュービックユニットはハートコアと同じものと理解してよい。

日本の特徴はこれらユニット設備設置方法として横に切る。床スラブを作ってから設置するのが普通である。外国の場合はそうではなく、先に設置するので、どちらの方がよいかという問題になると、修理の面から考慮してみると、後から設置する日本で行なわれている方法の方がよいのかもしれないと思う。

○A. B. S. の例(スライド)

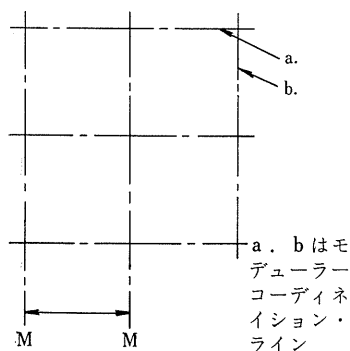
A. B. S. の場合の成型は、上、下、二つ割りとなる。

アクリル樹脂は熱可塑性であり、成型は、インジェクションが用いられる。衝撃に対して弱い性質であるので、運送時のために、そのプロテクトとして、外側をアングルで組み包んである。そのアングルに配管が施してある。

次にサニタリーユニットの例で、モデュールの原則に付いて説明する。

Modular coordination (モデュラーコーディネーション)

(モデュラーコーディネーションというのは、モデュールにより全面的な寸法調整を成就することであり、モデュール割りという提案もある——速記者注)



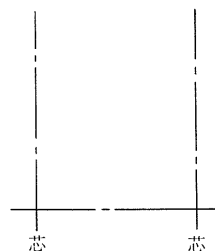
モデュラーコーディネーションでは越境は許されない。この範中からはみ出さない事であり、つまり面押えが原則である。

これに対して交渉という事もある。交渉というのは、自然石に柱(木)



を接合するような場合であり、どちらがラインに対してはみ出すか、又はへこみますか、勝、負がある。

又一方、相手に対して関係なく作る場合はお互に交渉なしに作られる。又、芯、芯で治める方法はモデュラーコーディネーションではない。



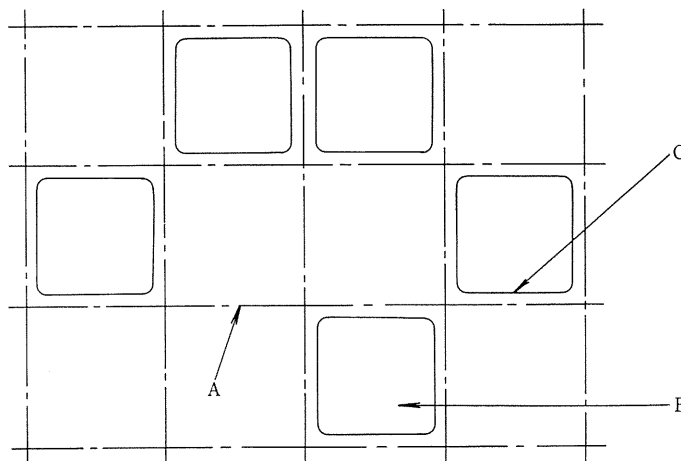
ユニット化をする原則は外面押えである。

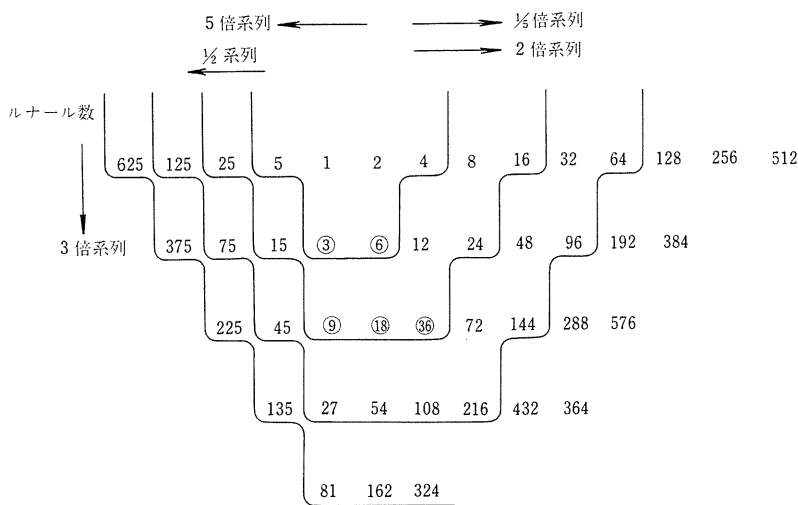
(A) モデュラーコーディネーションで治まらないところはどうしたら解決出来るか?

解決方法としては現場で治めることになる。実際の住宅では、モデュラーコーディネーションを用いる場所は4~5であるし、又、少いときには一つ位であることであり、現場で治める方法以上により治め方の解決策がないので、現場治め方法をもっと上手にする方法が用いられている。

(B) 内部は仕切りがなくてはならない。その内部においてはどのようなにも交渉可能でありそれはクローズドシステムである。

(C) 外部は仕上げをする必要がない。又仕上げを必要とする場合は、パネルを入れるか又は交渉となる。





モジュールに付いて (数, 寸法)

この数表では殆んど全ての数が網羅されている。1~9迄にしても7がなければだけである。

数表の下になる程同属が広い。ということとは行動範囲が広いということである。

○で囲んだ数値は自由度が大きい。しかし使いにくかったら意味がない。これらに付いて、

- (1) 数値として面がよいか (3, 6, 9, 18, 36)
- (2) 使い易いかどうか?

等に付いて考えてみると、(1)に付いては日本は昔から尺が単位でありそれが寸法の基準であった。(3尺, 6尺) 他方ヨーロッパではインチが使われていた。尺もインチも約30cmである。ヨーロッパでメートル法が適用されてから30cm単位が多く多くの事に使われている。建築の場合では30cmが殆んど決定的な単位として使われている。

ヨーロッパでは戸口、窓等に規格がなかったので各メーカーが各自にクローズドシステムで開発していた。しかし最近30cmの基準が使用される傾向であり、特に大会社ではこの寸法が多く使用されているが、個人住宅では現段階ではまちまちの寸法が使われている。

日本の場合、1尺、3尺が基準寸法として使用されたが、その治め方が一心であったので、モジュールはなかったと云われてる場合もあるが、柱やその他多くの物に共通の寸法のものがあつた。

畳の床、フスマ、建具等畳屋とか建

具屋であらかじめ作って持っている類のものがあつた。これらは江戸時代に寸法その他が確立されている。モジュラーコーディネーションが歴史的にみて早く確立されたのは日本である。

3尺≒90, 1間≒180で30cm前後は世界各国で使われているので、90cm, 180cmは変えないで使用したらよいのではないかと思う。

質問 Room size 2400に付いて

答 私はルームサイズに2400はもってくる必要はないと思う。ルームサイズをなぜ決めなければならないのか?

質問 プレハブとは何か?

答 プレハブの方法にも種々あるわけであるが、最も大規模の方法はリフト・スラブ方式である。万博のお祭り広場の屋根がそうである。

作業としてはコンクリートパネルを地面で作り、リフトアップするわけである。(シェル2400, 1600日産10枚位)

工場の屋根等に使われる。運搬方法としてはその物自体に車を付着して、階数分だけ床をつくり、骨組みにリフト・アップする。

テルト・アップ方式は壁面を地面で作り、その大きな壁面をパット立たせる方法である。(現場で鋳込む)

次にキャラバンに付いて。

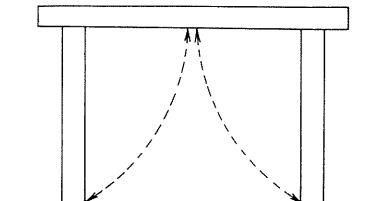
キャラバンという場合普通車が付くわけであるが、次のような方法がある。

- ・トレーラーハウス
- ・レジデンシャルキャラバン
- ・ホリデーキャラバン
- ・モバイルキャラバン
- ・ステーションナルキャラバン

次にテラピンに付いて。

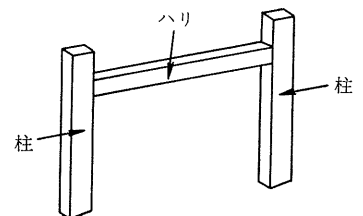
イギリスと日本にパレントがある。

方法は図のようにする。



プレハブ建築とは見本があつて(見本として展示されたり)、価格表示があるもの又は出来るものを指すものだと思う。その本来の目的は、従来のような住宅をいかに安易に作るかということになる。

日本でプレハブというと鉄骨が使用されている。鉄骨を使用する住宅はイギリスと日本だけであり、アメリカでは木材が主に使用されている。ヨーロッパは従来石造りであつたものがプレキャストになったわけである。ではなぜ日本で鉄骨が使用されたかということ、日本人は大変新しい物好きである事、又その構造が木造に似ている事



(図)と政治的な問題があり、鉄骨使用に対して住宅金融公庫が金を出したという理由による。

ではイギリスの場合はどうしてなのか? 従来のレンガ造りとは全く異つた鉄骨構造がどうして出来たのか? 鉄骨構造は学校建築に多く使用されている。戦后教育改革が行われた上に都市人口増加等があり、学校を急そくに作る必要が生じレンガ作りでは間に合わなくなり、レンガを安易に建てる治具として使われた。

まだまだプレハブに付いては話したい事があるが、簡単であるがこの辺で今日は終りとする。

“スタンダード・リビング” 討論会

12月11日（金）

虎の門教育会館 6 F 中会議室

講師 菊竹清訓

（建築家）

講師 金子勇次郎

（建設省建築生産企画室長）

講師 小原二郎

（千葉大学建築学科教授・当協会会員）

講師 白石勝彦

（白石勝彦住空間設計室長・当協会副理事長）

講師兼司会 三輪正弘

（環境造型研究所長・当協会会員）

三輪 今日の課題は“スタンダード・リビング”ということですが、私はむしろ“リビング・スタンダード”といった方がよいのではないかと思います。“スタンダード・リビング”という“規格化された住宅”というふうになってしまう。今日の討論では、当然、規格住宅の問題もできますでしょう。最近の住宅産業といった分野からの準備はたいへんなものです。しかし、日本人の住居はどうあるべきなのか、我々の住空間・住環境に対する問題点は今後どうなるのか、それが住宅産業というもので解決しうるのか、といったところまで、話をひろげていただきたいと思います。

まずはじめに金子さんから、今日の住宅産業がとってきたゆえん、それがどういう問題になりうるのか、そして今後の住居のなかでリビングのスタンダードということがどういう問題であろうか、その辺までお進め願えればと思います。

金子 住宅産業という言葉は、3年

くらい前からはやりだしました。しかし、その使い方には、それぞれかなりニュアンスが違う様に思います。

そこに入る前に、住宅の産業的生産ということからお話ししましょう。

1つ1つの家族が勝手に場所を選び、勝手に自分の家を建てれば生活のできた時代は、とうの昔に過ぎ去った。今はある環境、立地という様なより大きな条件のなかでいくつかの住宅が群をなして住宅群を型成し、そこにいろいろな公共施設を伴って、はじめて居住が成り立つのです。住宅の建設には、1つ1つの家族ではどうも解決しえない問題が密接にからまっている。その上、最近特に、人手不足、材料高、土地が手に入りにくい等も加って、住宅を建てるのが非常にむずかしくなってきた。

問題を解決するのにいろんな考察がなされているが、その1つは、できるだけ資材・労働力・資金を効率よく使う為に生産過程を合理化することである。それは、今までの注文→一品→現場生産という建築生産のかたちを、計画的な予想に基づいた未込み→大量→工場生産という近代工業の生産課程に切り換えることによって、生産性をあげることである。しかし、そういう意味の事は随分昔からいわれてはいたのだが、建築、特に住宅生産が工業化される様な状態にはなかなかならなかった。

昭和20年代は、戦争による住宅の絶対量の莫大な不足を解消するために、とにかく建てればよかったが、30年代に入った頃には住宅問題の性格が変わった。急激な経済成長に伴って、大都市近域に多くの人々が急激に集まった。それと、日本の所帯構成は長い間、一貫して5人平均であった。それが、昭和30年から35年までの5年間に一挙に4人になった。いわゆる核家族化で

ある。世帯の核家族化によって住宅需要はふえ、それは都市地域に集中して発生する様になった。それらが住宅問題であり、それに対する政策を考えなければならない。という風に変化してきた時に、日本住宅公団がつくられた。そしてその頃から日本の住宅政策の場における住宅建設の仕方はだいぶ変わった。たくさんの住宅をまとめて一度に建てる。それは工業的生産が前提としている。計画的な繰返し生産の為の需要の集約化を実現したとみればよいでしょう。1個1個のメジャーでもって、誰れが、どこで、どの様に住宅を顕在化させるか、ということがわからない状態では大量に生産することはできないわけです。しかし、住宅公団が桐ヶ丘に、3000戸の団地を建設するということになれば、それを前提にアパートの量産体制をつくることのできる。現実に住宅公団の需要を対称にして、2つの工業的生産の道が開かれた。

1つは台所のステンレス流し、このステンレスのプレスはけっこうむずかしい技術で、いつ、どこで、注文がくるかわからない、という状態ではそれを開発するだけの資金投下はできない。しかし成功すれば、住宅公団が一年間に何万個の発注をするという約束のもとにサンウェーブが開発した。そうしたら、たちまち、住宅公団のみならず、全国津々浦々の流しまで全部ステンレスに変わった、という非常に大きな現象が起ったのです。

もう1つはコンクリートのプレキャスト板による中層アパート、この技術は、住宅公団でとりあげた頃には、すでにフランスや北欧諸国では受注段階にはいっていた。しかし、日本では地震があるし、ヨーロッパほど断熱性を必要としない、あるいはヨーロッパに比べて何んといっても生活水準が低い

のでヨーロッパで開発されたものでは金がかかりすぎる、といった様なことがあって日本で開発されたのが現在のものです。

そういう風に住宅そのものを出来るだけ工場で作ってしまおうというのが、プレキャスト板をつかったアパートであり、もう1つ、どの住宅にでも必要な部品を規格化して大量生産しておく、部品による住宅生産の工業化、それがステンレス流しであり、アルミサッシでありするわけです。この2つの方向が昭和30年代の住宅政策の柱となりました。40年代にはいって、私達が第1期住宅5ヶ年計画の生産計画をたてようとしてみると、我々の30年代の努力は、生産課程の特に生産技術に重点をおいたものに止まっていたという反省がでてきた。

現在の経済社会の基本的構造と、我々の住宅がつくられている課程とを比べてみると、非常に大きな開きがある。現在の一般的住宅の経済メカニズムとしてのつくられ方は、おどろくべき成長を示している日本の産業構造とはほとんど無縁である。住宅の生産のされ方、供給のされ方は産業となっていない。我々は住宅の生産供給を、日本の巨大な生産力・供給力をもつ産業構造の一般的パターンにあわせる必要があり、住宅供給の産業化が必要であると考えに至った。住宅生産の工業化は、住宅供給の産業化を計るにあたって、中核となるべき部門ではあるけれども、もっとその前提になる様な条件がかけられている。

しめくくりをしますと、生産課程・生産技術の工業化だけでは日本の住宅供給の合理化はなされない。住宅供給のメカニズム全体を、進んでいく超現代的な社会・経済にマッチする様にかえていかねばならない。そういう努力をしよう和我々は考えているが、その時に、住宅を上物の建築物と考えてただけでは本当の向上はない。都市の生産環境、流通環境とうまく組織化された大きな生活空間のエレメントとしての住空間をつくりだす必要があり、それを享受できる様なメカニズムを考えていきたいと思っている。

発展していく人間の空間が円滑につくりだせる様な、経済構造、社会構造

をどの様につくるべきかを考えるのが、住宅産業の振興だと思っている。

三輪 どうもありがとうございます。次に菊竹さんから、今の金子さんの御発言につながっていくと思いますので、日本人のこれからの住空間はどうなるのか、という観点から問題をお話し願いたいと思っています。

菊竹 今、金子さんから日本の住宅における生産構造について適格な指摘があったが、私はそれに対して生活をする側と、住宅との関係についていくつか問題をあげてみたいと思います。

まず日本の場合、住宅は私的な財産として受けとられている。それを社会的存在にまで、意識の変革をしなければいけないということと、社会環境の重要な基盤としての公共住宅が供給される様な状況を我々は何んとかつくりなければいけないということである。そうでない限り、いい住宅、いい環境を獲得することはできない。

例えば、日本で1944年から1966年の22年間に110万個の公営住宅が建設された。1年間に約5万個、住宅総数の約9%である。これに対し、英国では、1946年から1952年までの労働党の政府の時には約80%、保守党の政府になると少し差があるが、それでも55%くらいが公共住宅である。日本の方がはるかに経済の発展はすざましいのに、そういう数字がでている。さらに、今の日本の住宅の所有形態をみると、持家が58%、公営住宅5%、民営の借家・アパートが33%で、ここで我々が何んらかの住居の問題を考え様とするのはその58%の住宅について、ということになるのだろう。しかし、これは標準の住宅の場合で、例えば被保護所帯という比較的生活水準の低い層の場合、持家は約20%、借家・アパートが約65%、つまり圧倒的多数の人が自分の手を加えて住宅を考えることができない環境に住んでいる。そういう環境を変革していく為には、公共の住宅を大量に供給する以外はない。

第2に、移住か定住かという問題がある。これは、人間のアクティビリティがさかんになって自由に自分の住居を求めて移り住んでいくという考え方と、どこかに定住しコミュニティを完成

し、その中で自分の環境を確立していくという考え方とで、前者を“選択適応型”、後者を“代謝更新型”といってもよいのではないか。それぞれ住宅のつくり方も当然変ってくる。“代謝更新型”であれば、何んらかの型で手を加えていける様なものを考えなければならぬし、“選択適応型”の場合はある地域にいろんなタイプの住宅をつくっておき、家族構成別にうまく移り住んでいくというようにすればよい。住宅公団などでも、新婚早々は2DK、子供が生まれたら3DL、もっとふえれば4DKなり、もっと大きいところなりに移ればよいという移住型の住宅の考え方である。

しかし、移るとこまることも考えなければいけない。例えば、子供の心理的・情緒的な成長がかなり阻害され、閉鎖的な子供をうみだす。又、中国の蛋民(たんみん)などは家族全員が船にのり自由に移動ができる。好きな時に好きな所にいき好きな様に生活できる。たしかに非常なモビリティがある。しかし、そういう自在なモビリティがうみだしたものは何か。学校もない、病院もない、文化施設もない、警察もない、という無政府状態です。公共的な施設を集ってつくりだすというメリットがそこにはまったくない、いったいそうしたことを誰がやってくれるのか。やはり、コミュニティ型の生活環境のつくり方というものが歴史的に重要な意味をもっているということを改めて考えさせられるわけです。

第3に、少々独断的だが、間仕切りがふえることが近代住宅だと考える。まず、食寝分離が起こる。次に、就寝分離、親の寝室と子供の寝室をわけ、又、子供でも女子と男子をわけ、という様に間仕切りがふえてくることを近代住宅への移行と理解しているのだが、果してほんとに間切りをどんどんふやしていけばよいのか、ということは、家族生活にとっても1つの問題である。

間仕切りがふえることによって生活と住居の形態がどの様に対応していたかということ、一番はじめは、民家などにみられる様な広い空間をいくつかに仕切る、仕切り型住宅。それに1部廊下を設け、ある部屋にいくのに他の部屋

を通らなくてもよいという中廊下型住宅。そして中廊下型住宅に応接間というプライバシーを確保した独立室が加った文化住宅といったもの。そのうち、子供部屋が独立、やがて寝室が独立し、それがさらに今日、リビング・ルームという家族共用の部屋を中心に個室がある、という形態にまできている。

最後に申し上げたいのは、生活と住居の対応を考えてみるときに、生活を非常に形式的にしかとらえていないのではないかということである。特に家族生活のあり方についてなどは意外にわかっていない。しかも、それをどの様に調査したらよいのかということさえもわからない。そういう、生活と住宅あるいは住宅のつくり方の相互関係のパイプがもうぎれているのではないかという印象を強くする。もしよい住宅を回復しようと思えば、どうつくったらよいか、どうつくったらよいか、という問題にとりくむ必要がある。住宅のソフトウェアを研究していかなければならない。

金子さんがおっしゃった様な、少なくとも生産面でのスタディが本質的に推進されようとしていることは、大変なぞみで、その反面我々建築家が、生活に対する人間の気まぐれ、移り気などをどの様に追っかけていくか、それらを通して今日の“スタンダード・リビング”の問題を考えなければいけないのではないか。

三輪 どうもありがとうございます。今のお話して生産の問題も含めて住宅の本質的なこと、特に建築家の直面している、元点のあいまいさなどが問題にできました。小原さん、白石さん、それぞれのお立場からの問題提起あるいは、金子さん、菊竹さんへの御質問でも。

小原 今、お2人からお話があったが、私からの今日のテーマの考え方を申し上げたいと思う。

従来建築設計の場合、分析的思考と集積的思考がある。普通は、予算があって、土地があってという具合に分析的であるのだが、逆に人間を中心に、必要なものを集積していくことも考えられる。その境界領域をどこにおくかということが、“リビング・スタンダード”を考える上でかなり大事だ。具

体的にはインテリアがその領域である様に思うが。

では問題がどこにあるかということ、例えば人体を中心にした寸法ということで考えた時に、果して今までの様な寸法概念でよいか。あるいは材料だが、世の中が変っても我々の身体は人武天皇の時からちっとも変わっていないのだから、そばには生物材料がいちばんよいのではないか。ナイロンがいくら発達しても、肌着にはやはり木綿がよい様に。

もう一つは心理尺度という問題ですが、我々は室内寸法でも何でも物理尺度で片づけていますが、心理尺度をどう考えるかということがある。会議などの時、テーブルの配置の仕方でも内容がまったく違ってきます。又、学校で教壇にのぼって話をするのと、おりて話をするのでは、物理尺度は同じでも心理尺度が全然違うということだが、我々はそういうものをいかにインテリアに導入するかという問題である。

今、寸法、材料、心理尺度という3つの例をだしたが、そういう小さなことはいってこないと、きめの細かい環境はできない。人間に近いほど精度の高いものがおかれ、遠くなるほど精度は底くなり、金のかけ方もそれと平衡してよい、という風に私は考える。しかし現在は逆で、外はピカピカ、中はいかげんにということのほうが多い。

このあたりをどう解釈するか、どう解決するかが大きな問題だろう。

次に“人間”をどうとらえるか、ということだが、“人間”というのは“人間の間”つまり、人の空間であるわけで、それがわかればインテリアの問題は簡単に解決できるはずです。人間ということの中で、心理的な面はともかく、生理的・肉体的にも我々十分つかんでいないが、建築の場合には、人間をあらゆる方向から把握することが必要だと思う。

最後に実験住宅の問題だが、今の様に住宅産業が起ってくると、何らかの形で実験は必要である。悪くいうとモルモット状態でしか答のでこないものもあるということだ。今までの建築は一品製作で、建築家とクライアントの関係だから話がついた。しかし、大量生産の場合、相手はユーザーであ

る。そこで、かなり慎重な実験を行ない、それをフィードバックし、マイナーチェンジしながらだんだんよいものをつくっていく。そういう形の実験が行なわれなければならない。科学的な実験ならよいが、意識だけの実験は問題である。現在、その実験の方法が確立されていないが、今日の“リビング・スタンダード”の一番の問題ではないかという気がする。

三輪 それでは白石さん、お願いします。

白石 案内状には“スタンダード・リビング”と書いてあったが、この会場にきてみたら“リビング・スタンダード”とおっしゃっている。いずれにせよ、私は“スタンダード”という言葉を使うことには疑問を感じる。

“スタンダード”をどう定義づけるかがむずかしいが、私なりの問題点をあげてみたい。

住宅産業の工業化という問題と、社会的な問題との間にある、人間のメンタルな面をどう解釈するかということが非常に大切だと思う。特に私はインテリア・デザイナーとして、空間と人間、人間と物との関係に興味深いわけだが、そういう中で、人間を単なる生物学的な動きだと寸法だとか、尺度だとかいうとらえ方だけでなく、愛情とか憎しみとかいう様なメンタルな面が、どの様に空間に影響を及ぼすか。又、空間が人間にどの様に順応することを要求しているかということが問題になるだろう。

さきほどの住宅生産の工業化ということは計画的な見込生産ということになるから、当然、我々の生活を軽量化していかなければならない。人間の生物学的あるいは自然科学的問題からいえば、ある程度の軽量化はできるが、ところが、実際には軽量化できない部分も多く、そのできない多くの部分を、どの様にスタンダードに結びつけていくかが一番の問題だと思う。

今まで我々のもっていた生活様式、あるいは習慣をどういう風にスタンダードの問題として組み込んでいくかという様なことが問題になるのではないかという気がします。

三輪 それではもどりますが、金子さん、いかがでしょうか。

金子 さきほどお話しした様に、私、あるいは建設省としては、住宅生産の工業化から住宅産業の振興という考え方に広げてきた。一方、世の中の流行している住宅産業論は少し意味が違う。住宅を自動車の様に大企業の大工場でワン・ラインで組み立て、商品として売り出すという発想の様である。住宅産業という言葉その様に使うことは非常に危険であり、正しく使ってほしいと私はいい続けている。

今日の“リビング・スタンダード”だが、住宅についてもしあるとすれば、それは“ミニマム・スタンダード”で、これ以下であってはならないというものであろう。こういうのが望ましいという、“スタンダード”はないと考える。住宅というのは、そこで何がおこるかわからない、あるいは、何がおこってもかまわない空間で、機能を限定して考えてはならない。そういう中で“スタンダード”を考えると、安全性・健康維持の為に、それ以下であってはならないということはあっても、皆こうすると都合がよいという、単純化の為の規格化は住宅については考えられない。ただ住宅のつくり方、あるいは、それに付随してくる部分、コンポーネントとか、その材料については単純化の為の規格化はありうる。単純化の為の規格化がされてはならないものについて、それをつくる課程、必要な構成部分の規格化が可能かどうかの問題としてとらえるべきだろう。

もともと住宅には社会的側面と私的側面があるが、それを明確にわけて認識する必要がある。例えばアパートを例にとって考えてみると、1家族にとってはそこを生活空間とすることは不可能であるが、多勢の人が住んで結果的に住空間として成り立つ。そしてここでは、水道・下水が必要、テレビがみえなければならない、電話も通じなければならない。又、子供を幼稚園にやる、買物をするとか、いろいろな社会的メカニズムの中に適当な環境をもって存在しなければ、住空間にはなりえない。そういう住宅のもっている社会的側面。

それと、この空間は私の家族のものである。そこで生活をする為に、どんな色のどんな材料で、どの位の家具

を、どの様にレイアウトするかという様なことを考えるのは、まったく私的なことである。そしてそれは、アパートに住もうが、庭つき1個建てに住もうが同じである。

以上の2つのものを現在の様にいっしょに考えてしまって、鉄筋コンクリートの外側打ちっばなし、内側はラッカーふきつけ仕上げと、全ての機能をゴチャまぜにやっているのは、お金がないからしょうがないというものの、今後このままでよいとは考えられない。

三輪 そうしますと、シェルターというか、1住戸を包んでいくものの素材、それは標準化する方向でもかまわないが、内部の問題はかなり多様化・自由化でよいのではないか、ということでしょうか。

金子 社会構造にあわせた都市空間のつくり方という、スタンダード、モジュール化はなければいけない。しかし、そこにはめこむカーテンウォールがそれと同じモジュールをもっていかなければならないか、個々の住居の顔として多様性を発揮してもよいかどうか。そしてインテリアについては、それを組み立てる要素、パーツ、コンポーネント、あるいはシステムなどが標準化、規格化できたら、現実の生産に結びつくだろうということです。

三輪 1個建てのプレハブ住宅をみると、組み合わせをかえて多様な間取りがつくれる。80タイプも100タイプも200タイプも用意してあります、というPRなのだが、そこで私は、住宅というのは200種類も、300種類も考えられるものではないのではないかと思います。やはり日本人の習性などからわいだしたスタンダード、基本的な型があるのではないだろうか。そうすると、おっしゃるとおり、どんな間取りでもできます、という供給の仕方はかえって不親切ではないかと思います。

金子 私達は去年の5月に「住宅産業のあり方」を書き、その中で、多様性・柔軟性・社会性という3つを強調した。現段階では統一、規格化されたもので十分生活内容を享受できるグループもあるので、それらに対しては、工業的生産を進展させ、コストダウンを計ることが必要であると思ったのです。

今のご指摘のとおり、本質的にはそんな無限の多様性は不必要である、という考え方も検討するべきだと思います。

金子 今の住宅産業の多様化の与え方には2つあると思います。カプセルの組み合わせはいか様にもできますという多様化、もう1つは鉄骨のスタンダードをつくって、住宅の工業化だと思い、どの様な住宅もできますという多様化。ところがこれは限定してしまった多様化と、まったくバラバラに与えた多様化で、かんじんの真中がない。そこで、今日のテーマとしている“リビング・スタンダード”だと思うが、もっと本質的な最大公約数をふまえた上のすまい方の多様化でなければいけないのではないか。

三輪 菊竹さんいかがですか。

菊竹 さきほどのことに補足して申し上げたいのですが、多様化の問題と、もう一方で住居環境の問題として集約化の問題がある。

1個の住宅のインテリアにかかるコスト係数を1とすると、住宅は5～10、さらに1軒の住宅が文化的な生活をする為にかかる公共投資は25～50である。この辺をいい加減にするので問題が大きくなってしまう。

壁にアルプスの写真をはり、それをながめて幻想を描く。集約的に環境をよくしようと努力しないで、自分の部屋の写真で解決した様になるのは一種の魔術で、インテリアがそういう役割を受け持つことになり、次第にそれが巧妙に行なわれることになると非常に危険であると思う。むしろ25なり50なりの公共施設、集約的な問題に対して、1の役割りしかもたないインテリアなら、これだけのことでしかないということをお願いではないか。

インテリアの問題から出発して、コミュニティの問題、公共住宅の問題、政府の試作住宅の問題、住宅政策の問題などに発展させなければ、究極的な解決はできないということを認識しておく必要があるでしょう。

それともう1つは住宅と生活を対応させて考えた時に問題はそれほど簡単ではないということ。物理的な対応関係は究極までいくと、ロケットとか人工衛星の様にまったくコンパクトにな

と思う。しかしさきほど白石さんがおっしゃったことも同じだと思うが、人間と環境との関係は物理的ではなく文化的な対応関係をもっているのではないか。だからよい空間をつくりだす為には長い間、多くの人がかかって少しずつ、つくりあげていく必要がある。それが伝統だとか、文化とかいうものだが、それはまったく無形のものだ。

そういう意味で、公団住宅なども前に住んだ人が棚をつけたりして工夫をしていけばいるほど住みやすくなっている、と解釈したい。住む工夫に、ある特定の家族の為から出発して、どんな家族が住んでも住みよいという環境をつくっていく。そういう生活の仕方が必要だと思う。だから、住宅は4代、5代と住み変えられているほど、住みやすくなっているはずであり、それは文化の蓄積が住宅に起っているとみてよいのではないか。又、それが可能な住宅を考える必要があるのではないか。これが私のいう“メタボリズム”の考え方です。

三輪 今、空間と時間という広い事象で住宅問題をとらえていただいたのですがその中で、インテリア1に対して、公共投資が25～50というコスト係数の話がありました。私は人に近いほど住空間の質は密度が高いという仮説をたてますが、その場合、自分の空間密度の領域をどう広げるかという問題があります。経済効果から計画される都市計画からインテリアまでという図式はマクロからミクロという関係になりそうですが、それが形式化すると、スタンダードがそれこそ規格・標準になってしまう。それに対してミクロからマクロに領域を広げていく時に、インテリアの役割は単なる1という係数ではないと考えますが、菊竹さん、いかがでしょうか。

菊竹 三輪さんのおっしゃるとおりですが、少しつけ加えたいと思います。インテリアを特定な人の生活空間の為の条件と限定してとらえると、非常にスタティックになるが、これを不変的な、社会的しくみとして、コミュニティ自体が資金援助をするとか、考えるところかすべき問題としてとらえるならば、それはダイナミックなインテリ

アの考え方が可能になってくる。社会的に意味のないインテリアがあたかも意味がある如く受け取られていることがままある。これは何もインテリアだけを批判しているわけではなく、今の住宅建築でもいえることです。

三輪 それでは今の問題を白石さん、受け取めていただけませんか。

白石 インテリア1、住宅5～10、公共施設25～50、という数は、公共的、私的ということからではなく、ライフサイクルで考えてよいのではないか。インテリアのそれぞれのエレメントというのは、メタボリズムからいえば老廃物になってしかるべきもの、細胞が新しくできれば老廃物もふえるので、ライフサイクルの短いものから消しことになる。インテリアデザインという言葉が、今はデコレーションという意味が強いので、そういう意味では老廃物として捨てられてよいと考える。

もう1つ、さきほど試作住宅は危険を含んでいるというお話があったが、私は憶病になりすぎていけないと思う。例えば、洋式トイレを考えた時、住宅公団が採用しなかったらこれほど普及しなかっただろう。よさを知らないままで住んでしまうことのない様に、建築家やデザイナーがパイロットの役割りをすることも必要だろう。

小原 さっきは問題提起なので言葉が少なく、誤解を招いた様ですが、私は実験は必要である。しかし、それはあくまでも慎重であるべきだといいたかったのです。それを認めなければ進歩はありませんから。

菊竹 今の実験ということだが、フランスの場合、国の政策として実際に実験住宅を建てています。そして国家の施設住宅の5%を実験住宅に使うことにきめているということです。ちなみに、フランスではもう1つの芸術費というものをみていて、あらゆる住宅の総コストの3%を芸術家と協力して、芸術的なものをつけ加えることを規定しているが、大変おもしろい。

金子 今、1つおもしろいことを思いました。この間、晴海で“グッド・リビング・ショー”がありました。みのべさんが東京見本市協会の理事長として、開会の辞をおっしゃった

が、私は非常にビックリした。「公害の時代だ、外へでたら歩くところもない、すう空気もよごれている、泳ぐところもない、せめて家の中ぐらいいは豊かにしようということで、この“グッド・リビング・ショー”を開いた」と受け取れる様なあいさつをなさった。これでは世の中よくなりません。さきほど菊竹さんからインテリアを悪く使われると、というお話があったが、このみのべさんの言葉の中にまさに悪く使う例があった。

三輪 それでは、会場の方のご質問をいくつかお受けします。

質問一 会員・スガノ氏

我々若い者は、マンガにしても、音楽にしても、インテリアにしても参加することによってそれを感じる。住宅にしても、自分で住宅を建てることは無理だから、外のいろいろな施設を利用することを考えるがどうか。

三輪 今の若い世代の参加のパターンの問題。住居以外の施設を有効に利用することで住居環境を考えていったらどうか、という意見はどうでしょう、菊竹さん。

菊竹 そういう風に動き回って生活をする型ももちろんあってもかまわない。しかし、個々の住居環境を充実させる努力をしないでそれだけに期待をするのでは非常に悲観的だと思う。その例を2つあげてみます。

1つは電柱の問題。2、3年前にトランスに雷が落ちて下を通っていた主婦が大やけどをした。これに対して新聞は全部、天災だといった。しかし、地中に配線すれば、雷は電柱に落ちなかった。架空線は危険であるということを確認し、埋蔵ケーブルにしてほしいとい運動を起さない限り、同じことが起りうる。自分の家には電気がきているからいい、電柱は家の外の問題だから関係ない、という姿勢ではいつまでたっても、住宅環境はよくなりません。事実、電柱の問題に関しては100年前にロンドンで市民運動がおこり、架空線をケーブルにしている。従って、街路樹をあのように切って、いためることもない。

もう1つは病気が、赤痢は下水道の完備していない国に流行する。下水道なども、地区全体の問題として考え

ない限り解決しない。

インテリアも自分のところさえよければよいという考え方では、質的向上は望めないと思う。一方でそういう施設はいらないといっているのではなく、それがあから自分達の環境の少々の不満はがまんしょうという態度ではいけないと考えます。

それと、「新建築」の住宅コンペでみられた若い人の考え方の1例だが、3階建ての住宅で、1階を子供の階、2階をリビングの階、3階を夫婦の階という様に3つの層で構成しているアパートがあった。隣りも1階は子供の為のスペース、3階は夫婦の為のスペースというわけだが、この提案は新しい住宅のあり方を追求していると思う。

金子 若い人の意見を聞いて、住宅供給の産業化がもっと強調されなければいけないのではないかという感を強くした。さきほど、自動車の様につくるということを批判したが、しかし、経済的活活動のあり方としては、やはり、自動車の様に商品をつくるという型にしなければいけない。商品の場合、つくるということに直接手を下すわけではないが、世の中にでてきた商品としては何らかの型で積極的に参加

でき、享受することができる。

もう1つは、自動車をつくっている人が、自動車を使えるようになってはじめて、自動車産業の発展をみたといえるのと同様に、住宅をつくっている人が、自分達の住宅としてつくれる様にならないといけない。はやくそういう時代をつくりたい。

質問一会員・氏

菊竹先生のお話して、調査・積み重ね・研究等が大切だとおっしゃっているが、もう一步で、カンということをどう評価なさいますか。

菊竹 私はカンというのは人間の特殊な大事な能力だと思う。能細胞というか、ニューロンとニューロンが近いせいで影響を与えあうのではないかと思うが、コンピュータをどこまでも小型化して相互に電流が影響しあうところまでいけば、あるいは機械でも可能になるのかもしれない。しかし、まず当分はありえないだろう。人間個有の能力として、順序を追わなくても、物ごとをチェックできる、「カン」というのは非常におそろしい。

金子 菊竹先生に反論ではないが、建築家は診断と処方する能力がなければいけない。クライアントの生活を診

断し、それに対し処方し、そして創造しなければいけないはずだが、日本人の場合、器用で「カン」がするどころから、診断も処方もいい加減にして、創造だけを強調する傾向がある。これは「カン」の逆用であろう。

三輪 それでは最後に今日のテーマである“スタンダード・リビング”について一言ずつお願いいたします。

金子 社会全体のあらゆる分析によって、ミニマム・スタンダードは出てくるが、総合的なスタンダードはない。

菊竹 ダイナミックなものとして、考えられるものはあるだろう。現実がどうかというところから出発して、皆で参加しながら、方向づけていく努力が必要ではないか。

小原 フィックスしたものとして、ある段階ではしぼらなければならないし、ある程度はしぼれると思う。

白石 観念的な言い方だが、スタンダードはあってほしいと思う。しかし現実にはあるかどうか疑問だ。

三輪 今日の問題、大きく展開されつつあるところで終わるのは残念だがここまでの問題提起にしておきたい。

皆様のご参加、ありがとうございました。

J I D・東京支部新年例会

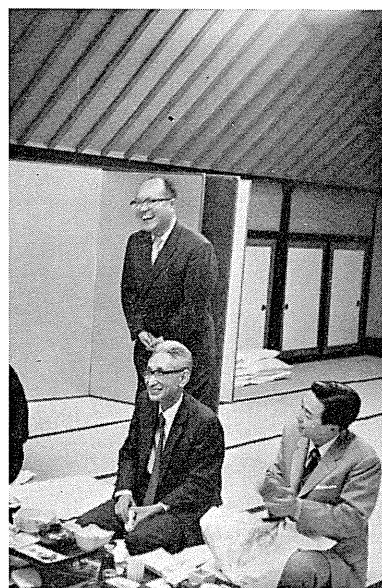
J I D東京支部の新年宴会は1月10日～11日、箱根小瀬園迎賓館で催された。前半はボーリング大会があり（小生ボーリングはにがてにて不参加）夕方現地にて会員の皆様にお会する。

総勢20名宴会場に集り、豊口理事長の挨拶に始まり、白石理事により一斗樽（爛漫）の蓋あけをして全員で会の発展並びに会員各位の健康と発展を念願し山口理事により乾杯、だんだん酔が廻り始めたところで自己紹介に入る。又家族の参加があり大変楽しい雰囲気の中に、じゃんじゃん飲み、又芸妓さんにより芸の披露、飛入等いつもの皆の顔とはぜんぜん変わった、いわゆる人間の他の一面を表わし、終始なごやかに会は進められた。特に遠路はるばる福井より梶谷氏家族、坂田氏家族、小畑氏夫妻の参加があり同席した者として敬意を表したい。（小畑氏には樽を運んで戴いた事に御礼申し上げます。）

樽全部飲んだと皆様には思われるかも知れませんが翌朝樽を見たら、なんと15cm位しか飲んでなく、すっかり残ってしまった。又飲もうと思っても、小生二日酔の気味、酒の匂にまいってしまい断念、残りは板前さんに寄附した次第、協会の気のよい点を箱根で見せました。

翌11日は自由行動であったので小生は彫刻の森美術館へ足へ運ぶ。月曜なので入場者は少く、又天候が幸いしたので屋外の彫刻をカメラに納めて歩いた、ブルーデル・マイヨールの作品には完全に魅了され、一点毎にカメラに向け、アングルを決める瞬間、はたと地面と小生との対話がそこにあった。なんと足元で霜がとける音が耳に入ってくるのではないか、この自然、作品、カメラ、人間との詩的対話が、ここにあり、しばし感動した。いかなる仕事もおあり度いと思った。

最後をお願いしたい事があります。



参加予定の方が出席出来ない事情はあると思いますが幹事並びに参加者には大変負担がかかるので是非共参加下さい。今回大変お世話下さいました吉永氏に誌上を借り御礼申し上げます。

東京支部 鈴木栄二記

PHOTO by E. S.

だ ん わ し つ

インテリアの思想をつちかおう

—— 協会に何が可能か ——

今日、私たちの日常の生活は、全ゆる分野のデザインの言葉でかこまれています。曰く、コマーシャル・デザインから工業デザインそして建築・都市デザイン、またインテリア・デザインとよばれるものまで百花繚乱。

しかし、今日これらデザインの背景として、理念なり思想なりが培養されているでしょうか。あるいは、不毛といわれながらも、現象だけは一見して花々しく躍動しています。

ここで、歴史上におこった各種芸術運動の推進力として、その思想の存在したことを、あらためて認識する必要があるのではないだろうか。

1907年、ピカソが「アヴィニオンの娘たち」を無惨にきりきざんでから、キュビズムが誕生し、美の視覚革命がおこなわれていった。そして、1910年ごろのキュビズムは、あたかも「医者」が人体を解剖するように「全ゆる対象」をバラバラに解体してゆく。まさに、それら解体されたかたちは、それ自体で美的なフォルムとして発言し、自己主張しながら統一されて、造形の法則性や構造へと発展していったのである。

まさに、キュビズムの視覚革命こそ新しい時代の美意識の出発点ともいわれているゆえんでもあります。

1910年、キュビズムの洗礼をうけたモンドリアンは、急速に自然形態から離反し、美的対象からその構成へと変身してゆく。

一方、1918年のフランスでは、オゾンファンとジャンヌレ（ル・コルビュジェの本名）がピュリスム運動にのりだし、近代の機械製品にあらわれた明確な構成を、「幾何学の時代」としての新しい美意識に定着させてゆきました。

これら、みずからの造形的言語の発言力を得たフォルムは、もはや普遍的な造形原理として発展してゆく。モンドリアンの造形は、1917年より「デ・スティール運動」として、また一方、ロシアに迎えた「構成主義」、そしてピ

ュリスム運動は機関誌「エスプリ・ヌーヴォー」を通じて、デザインという新しい対社会的な局面を展開していったのであります。

これらの運動に共通することは、何よりも新しい時代の開拓者との誇りと自信をもって進められたことであり、技術時代の機械に対する楽天主義がひそんでいたともいわれている。

こうした構成主義とデ・スティールの理念は、有名な「バウハウス」へと引きつがれる。ことに、グロピウス自身のデザイン理念の確立にさいしては、当時、あいついでおとずれた構成主義やデ・スティールのデザイナー達の影響をぬぎにしては考えられないといわれています。

一方、近代建築運動にとって有名なラ・サラ宣言の精神を、ここでもう一度、かみしめながら現代にも相通じる人間の英智を見逃してはならない。

1928年6月、スイスの婦人エレヌ・マンドロの発案によって、彼女のラ・サラの城に集ったヨーロッパ各国の建築家たちは、C I A Mつまり近代建築国際会議の結成を宣言しています。

宣言は、

建築が人類にとって最も基本的な活動であることを強調し、建築家にとっての課題は、彼らが生きている時代と社会を直接反映した作品をつくることである。このため建築を現実的な基盤つまり、経済的、社会的基盤の上に立たせ、そこから真の調和を達成するというのがその基本的意図である。

したがって、アカデミーの不毛な影響や使いふるしの形式から建築を解放しなければならず、これらのために建築家は国境を越えて相互に助け合うことだと強調している。

こうしたC I A Mの動きは、技術時代にあるべき建築造形への警鐘として大きな道標を少なからず与えていったのであります。

一方、今日の工業デザインは、近代的な工業生産への疑問から出発したものであります。

すなわち、工業生産、工業製品のもっている非人間的な側面を是正し、より人間的な生産の方法を確立し、つくり出すことを目標としていたものであらう。

然るに、工業デザインの正体は、経済の復興過程にあつての販売促進の手段であり忠実な下僕として活躍したことは否定できない。

その代表的な例は、コカ・コーラのビンのデザイン。無名の一青年が恋人のスカートの形にヒントを得てつくったといわれる伝説。

しかし、決定の真意は「実際よりもたくさんはいつているように見える」ことにある。

こうした工業デザインの思想は、人間の真の知能に対する正しい評価のスケールといえるだろうか。

今日のような工業デザインの思考の最初の実験者ともいえる英国のW・モリスは、1861年に彼の商会をつくり実践運動にはいつている。

この運動は、ドイツ工作連盟の「美術と工業、手工芸および商業の協力によって生活に関する造形の良質化をはかり、不良品を追放する」ことをモットーとした良質運動であり、さらにこれらの思想を発展させてバウハウスの運動へと受けつがれてゆく。

戦後26年間、私たちは多くのすぐれた工業・インテリアなど各種のデザインをつくっている。しかし、それらは単純な金もうけのためのメディアに過ぎなかったのではなかっただろうか。

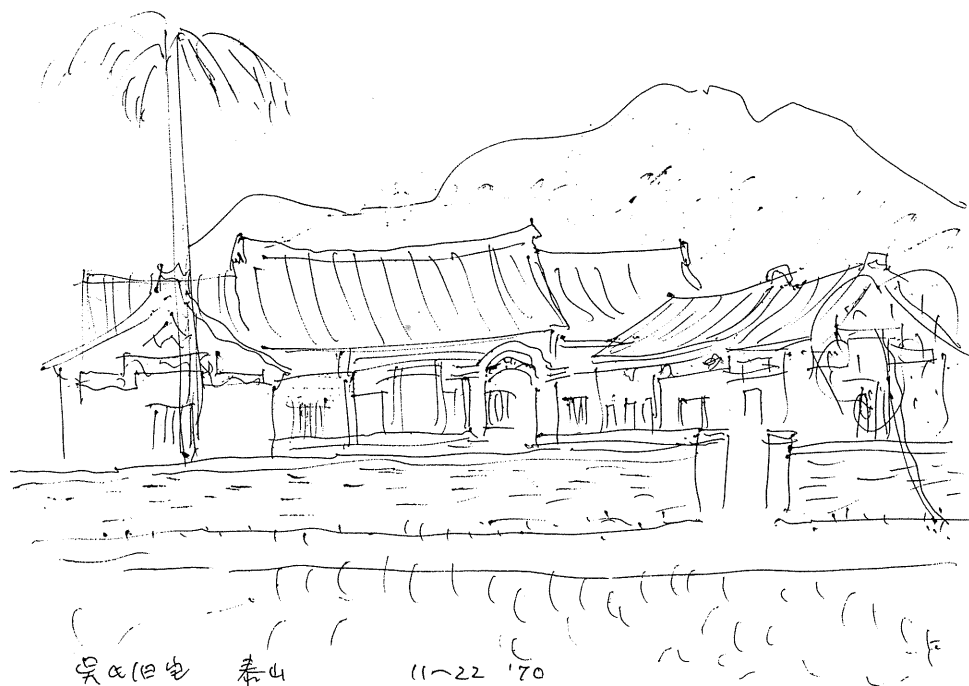
人間の生活を、ほんとうに豊かなもののある生活内容とするために、はたして、どれだけの産物を残しているのだろうか。

今日、私たちが全ゆるデザインされたものを見つめることは、人間の知能や人間精神のいとなみを見つめるようなものではないだろうか。

ことに、インテリアの思想をと問うときに、そのデザイン発想の原点や、その意義を奈辺に見つけることができるのだろうか。

巷にいわれているアメリカ式の企業戦略の尖兵としてのデザイン行為は、もはや、脱工業化の時代においてその力の限界を感じとしてはおらないだろうか。私たちは、今こそ、インテリアの思想を開陳して、何がこれからの人間生活にとって真にみのある豊かなものとなるかを真剣に思考すべき時点にきているのではないだろうか。

正会員 尾上孝一



東南アジアを巡って

正会員 豊 口 克 平

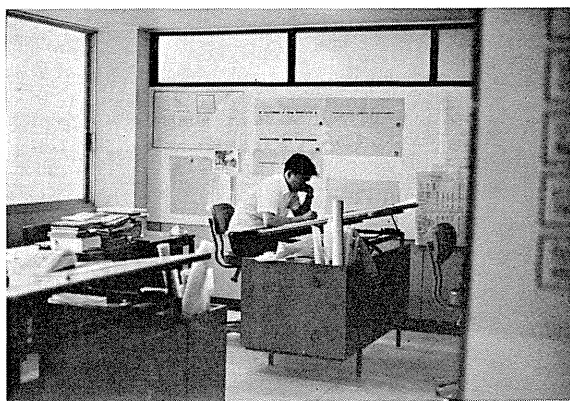
'70年の11月から12月にかけて3週間、通産省の委嘱で〈東南アジアデザイン調査便節団〉の団長として他の5名の人達と韓国、台湾、シンガポール、タイランド、香港と廻ってきた。各国の政府行政機関、工業あるいはデザイン研究指導機関、関係団体貿易振興機関、特許庁などと懇談したがその数30を超えるモウレツさであった。

私は近隣諸国について如何に現状把握が少いかを知らされ、今後の東南ア諸国との文化的、経済的問題のむづかしさを痛感させられた。

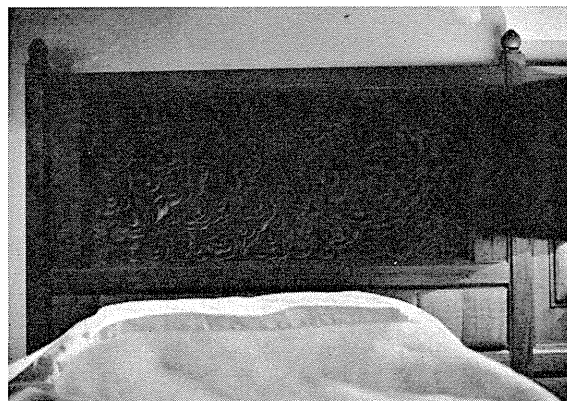
各国それぞれ国情が異り、文化、文明の在り方も異なるので一概にはいえないが、現在のところ経済的な面では日本

と可成りの格差があることは確かである。文化は別としても文明の享受も同様といえよう。シンガポール、香港のような都市的国家または政庁では生産工業の対象をまず軽工業、重工業へと向けているが、タイ、台湾、韓国になると軽重工業は勿論のことその他に伝統的工芸を新しいクラフトとして育成したいと希っている。それは観光者のためのスーベニアとして重要だからである。

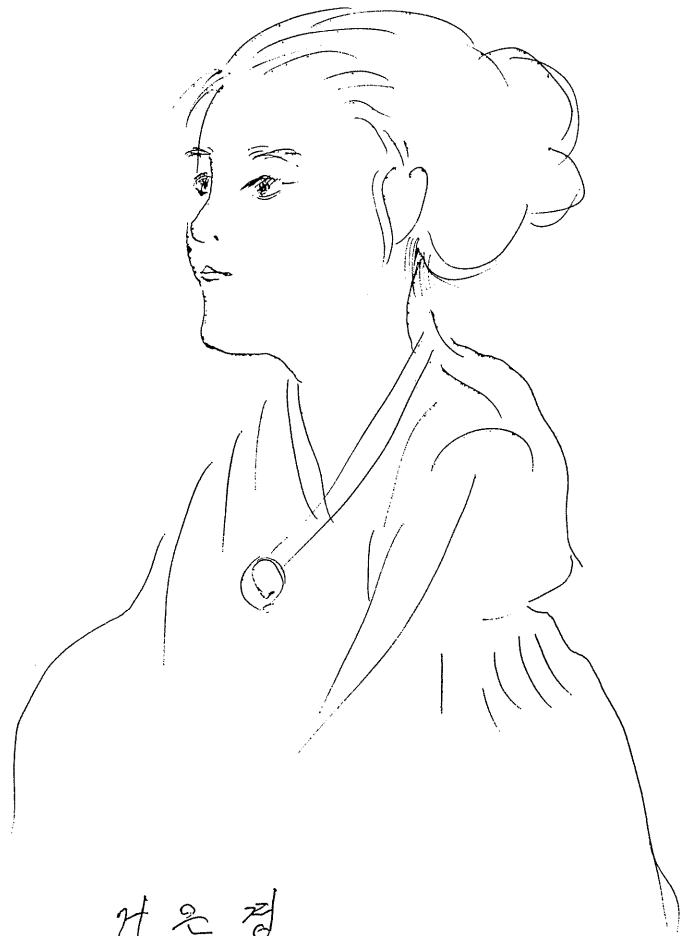
台湾にはデザインセンターは未だ出来ていないが、他の国々は最近設立され、将来を期待されている。丁度日本の工芸指導所が設立されたようなものであろう。職員は実に熱心で将来の産業にデザインを介入させてゆくことを念願している。各国のパイオニア的デザイナーはほとんどが外国に留学の経歴をもつ人達であるが、国も企業も輸出を目標に工業を開発しているため経済第一主義となり、彼等に



タイ ID. Testing Service Section



チエンマイのリンカムホテル



서은경

So on Greek

は満足するデザインの成果が得られないとゆう。またこれらの軽工業は何れかの国の企業との合併である場合が多く、そのために相手国のデザインを持ち込み、または製品をコピーすることで、自国デザイナーの働く場が与えられないとゆう悲劇がある。

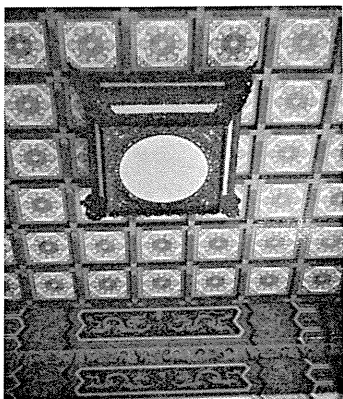
デザイン教育については大学程度のものを望みながら教へる側の先生不在で順調に進行しない。しかし短期ゼミの形で外国の協力を仰いだり、留学生を送ったり、将来は先づデザイン教育を確立しなければならないことを痛感しているようだ。

この教育とは単に大学教育をいうのではなく、プロデザイナーの訓練、企業家への浸透、消費者の啓蒙をさしている。各国の前向きの姿勢を現実に見て各国とも急速に軽工業の生産発展が促進されるように思える（日本は長い時間

をかけて今日に至ったが、彼等の場合はその1/5程度の時間で進行させられよう）

日本製品の評判はよく、もう欧米の商品など渴望する必要がないとまでいっている。また工業デザインの訓練や研究について大きく日本に依存していることである。

それにつけても進出合弁会社が利益一辺倒になりはしないかと心痛めるのである。この度の成果として今年秋11月には日本で、APO（アジア生産機構）の主催で＜アジアデザインシンポジウム＞を開催するについてその出席の賛成がとりつけられたことと、いま1つは突如一行が香港のFederation of Hong Kong Industryの依頼を受けこれも今年の＜秋日本工業デザイン展＞を開催することに大体見通しがついて、私達は旅行最初の効果をあげることが出来てうれしく思っている。



台湾 戦没者慰霊殿内部



チエンマイ 大山氏工房の漆器作業

◆ 新入会員紹介

正会員（東京）寺内万佐由^{てらうち まさよし}

（昭和13年12月11日生）

多摩美術大学室内設計科昭和38年卒業、神田学園、高村デザイン事務所を経て、現在伊藤建設事務所に勤務中、推せん者の中村圭介、鈴木暁両氏によれば、横浜センタービルの設計管理状況を見て本格的な基礎のしっかりしたインテリアデザイナーとして推せんに価すとされています。作品には「味の素レストラン」「割烹」「夢」その他の設計監理がある。

勤務先 伊東建築設計事務所

東京都渋谷区神宮前4-9-7

電話 03-404-0574番

正会員（名古屋）松本政雄^{まつもと まさお}

（明治36年10月27日生）

東京高等工芸学校昭和4年卒業、主として名古屋を中心として中部地区で活動され、建築ならびにインテリアの設計監理に多くの貴重な業績をのこされ、著書も「小住宅と家具」ほか数冊を数え、現在は松本建築事務所を自営する傍ら中部デザイン協会理事その他多くの役職があり、名古屋造形芸術短期大学教授として教育界にも貢献しておられます。また、かつては愛知県工業指導所工芸部長としての行政関係の業績もあり、文字どおり中部地区の中心となる方です。今回、当協会の中部支部設置のことについて、世話人としてその実現の功労者でもあります。以下に紹介する11名の新会員はすべて松本氏のご推せんによる人です。

勤務先 松本制作室（自営）

名古屋市東区萱屋町2-16

中野ビル

電話 052-941-3045番

正会員（名古屋）坂本竹三郎^{さかもと たけさぶろう}

（明治41年7月2日生）

大阪府立西野田工業学校高級科装飾図案科大正15年3月卒業、大林組本店設計部、内外木材工業等で設計（インテリアおよび建築）を担当して、昭和30年来坂本建築デザイン事務所を自営して、今日に至っている。推せん者松

本政雄氏によれば、自営後も店舗インテリアに多くの手腕を振り、人柄誠実で推せんに価するとのこと、ほかに日本店舗設計家協会正会員として、協会賞の審査委員として活動、また室内装備設計士協会中部支部の副会長をつとめておられます。

勤務先 坂本建築デザイン事務所

（自営）

名古屋市北区八代町1-54

電話 052-981-3128番

正会員（名古屋）若園 晃^{わかぞの あきら}

（大正13年1月2日生）

日本大学芸術科昭和19年9月卒業、昭和34年9月から1年間、スウェーデン国立芸術大学（金工科）留学歴があり、20年12月商工省工芸指導所入所来官界においてデザインの行政指導面に活動しておられます。昭和26年からは愛知県工業指導所技師として、また、38年からは愛知県産業貿易館デザイン室長として現在にいたり、その傍ら38年来中日文化センター講師として七宝技術の指導などの教育方面の活動があります。団体関係では日本流行色協会PI部会専門委員、中部デザイン協会常任委員活動などがあり、その業績に対しては推せん者も推称しておられます。

勤務先 愛知県産業貿易館

名古屋市中区丸ノ内3-1-6

電話 052-231-6351番(234)

正会員（名古屋）林 寅正^{はやし とらまさ}

（大正15年1月3日生）

昭和24年3月東京美術学校建築科卒業、34年5月ACSプロダクトデザイン科卒業。昭和24年吉田五十八建築研究室に勤務、加藤政谷商店勤務を経て、現在は(KK)中部デザイン研究所所長としてインテリアデザインならびに建築設計に活動をつづけておられます。また、43年来名古屋造形短期大学においてプロダクトデザイン講座を担当し、JIDAおよび日本建築家協会の正会員。推せん者松本政雄氏はその人格の高潔さとともに建築あるいはIDと共にインテリアについても深いデザインの手腕を有するものと推称しておられます。

勤務先 KK中部デザイン研究所

名古屋市東区横代官町9

電話 0561-961-6804番

正会員（名古屋）服部敏行^{はつとりとしゆき}

（昭和18年4月30日生）

昭和41年3月武蔵野美術大学工芸デザイン科卒業後安井家具（株）において外商設計課長として家具造作工事の指導、監督の任にあり、傍ら日本優良家具販売チェーン（ジェフサ）にも関係してジェフサデザイングループの編集企画を担当しておられます。推せん者の言を借りれば、若くしてショールーム（ショールームシヤングル）を任せられ、またデザインの技術的内容も高く、その円満なる人格とともに推せんに価するとされています。

勤務先 安井家具（株）

名古屋市中区大須3-12-35

電話 052-262-3311（代）

正会員（名古屋）富川 斉^{とみかわ ひとし}

（昭和7年11月2日生）

昭和26年愛知県立愛知工業高等学校図案科卒業、昭和40年フィンランド国立アカデミーオブアートインテリアデザイン科を卒業されました。昭和26年愛知県工業指導所技師としてインテリアデザインを担当、44年からは愛知県窯業技術センターの主任研究員として陶磁器デザインを担当し今日に至っておられる。中部デザイン協会に加入、委員としての活動もあり、推せん者松本政雄氏によれば、フィンランド留学中はインテリア家具の研究に従事し、また、最近転じた陶器のデザインにも次第に見るべきものがあるとのことでした。

勤務先 愛知県窯業技術センター

常滑市字三ツ池48

電話 05693-5-5151番(52)

正会員（名古屋）堀内啓二^{ほりうちけいじ}

（大正14年9月17日生）

昭和23年3月東京工業専門学校木材工業科卒業来引きつづいて名古屋市立工芸高等学校に勤務し、工芸、製図、工芸計画、工芸史、造型などの講義を担当して、学務の傍ら福沢木工（株）、

ヤマコー工業（株）などの開発部デザイン顧問として活動をつづけておられます。著作には「楽しいインテリア」（朝日新聞があり、さらに愛知県室内設計装備士協会理事と市広く活動し、推せん者によれば、永年の教職で後継者の教育に貢献するとともに、名古屋地区の家具界に対する貢献度も大であるとされている。

勤務先 名古屋市立工芸高等学校
名古屋市東区東芳野町1-10
電話 052-961-3541番

正会員（名古屋）^{くろの けいぞう}黒野敬三

（大正7年3月6日生）

昭和10年名古屋市立工芸学校木材工芸科卒業後、（株）誠工舎においてインテリア家具設計施工室に勤務し、現在は同社の設計担当の取締役として活動しておられる。回転椅子、居間セットその他の設計業績も多く、推せん者によれば誠工舎において重要な地位にあり、そのデザイン的手腕も大であると推称しておられます。また一方愛知県室内設計装備士協会の副会長の要職があります。

勤務先 （株）誠工舎
名古屋市中区千代田4-13-1
電話 052-322-5551番

正会員（名古屋）^{ほんだ まさゆき}本多正之

（大正13年1月2日生）

昭和16年3月名古屋市立明倫青年学校本科卒業、昭和26年愛知県工業指導所意匠課に勤務、プロダクトインテリアデザインを担当し、43年意匠課長心得、46年2月愛知県瀬戸窯業技術センターデザイン課長心得に転じ、現在に至っておられる。作品歴としてはフロアスタンド、明視ランプスタンド、多用途柵、安楽椅子などがあり、推せん者はこうした指導機関にあって斯界のデザイン向上に努めたことをたたえておられます。以上のほかは中部デザイン協会委員として活動をつづけていられます。

勤務先 愛知県瀬戸窯業技術センター
名古屋市千種区花田町3-58
電話 0561-21-2116番

正会員（名古屋）^{あんどう きよし}安藤 清

（昭和18年3月5日生）

昭和40年多摩美術大学インテリアデザイン科卒業、直ちに竹中工務店名古屋支店に入社、設計部において意匠設計を担当して現在に至っておられる。作品歴ホテルナゴヤキャッスルの家具全般、伊奈製陶名古屋支店ショールームインテリア全般その他があり、雑誌インテリア129号に「ホテルナゴヤキャッスル」を執筆、推せん者松本政雄氏によれば、技術面からも、センスの面からも洵にすぐれたセンスの持ち主であるとのこと。

勤務先 竹中工務店
名古屋市中村区広井町3-21
電話 052-563-7111番

正会員（名古屋）^{ごとおかつ お}後藤勝男

（明治38年10月24日生）

昭和3年京都高等工芸学校卒業、直ちに（株）誠工舎本社に設計部主任として入社、設計および管理を担当し、爾来、大阪支店支配人、東京支店常務取締役、本店専務取締役を経て、42年来同社技術顧問として技術面全般の管理に当っておられます。昭和27年には旧皇居北の間の両陛下玉座用御椅子の設計の他多くの業績があり、教育界にあっては日本デザイナー学院リビングデザイン科において、リビング概論、インテリアデザイン、ファニチャーデザインなどの講義を現在もつづけておられます。団体関係では（社）日本室内装備設計技術協会愛知支部理事の役職があり、推せん者松本政雄氏は、永年にわたる誠工舎の要職にあって、家具製作の指導的役割りを果たした業績をたたえておられる。

勤務先 （株）誠工舎
名古屋市中区千代田4-13-1
電話 052-321-8318番

正会員（東京）^{は せ がわ たつ お}長谷川辰男

（昭和3年10月24日生）

昭和21年京都市立第二工業学校木材工芸科卒業、田中建築・中川建築デザイン事務所などを経て、昭和35年（株）大丸に入社、装工部を経て現在は技術部設計課においてインテリア関係を担

当していられます。設計業績としては音楽喫茶店「夜来香」（新橋）、山王飯店（赤坂）などの外装、内装、意匠の設計その他の実績があり、上記の設計について「商店建築」「建築」誌に寄稿がある。加入団体としては全日本室内装備設計士協会、一級室内装備設計士、二級建築士の資格があります。

勤務先 大丸装工部設計課
東京都中央区高橋1-2
越前屋ビル3階
電話 03-271-3626~9番

正会員（京都）^{まゐかわよしひろ}前川孝博

（明治43年10月7日生）

昭和6年東京高等工芸学校木材工芸科卒業、爾来津市立工芸学校、岡山工芸学校、京都市立第二工業学校を経て昭和23年から京都市立伏見工業高等学校と歴任し、現在も造形、工芸計画、工芸製図、工芸デザインなどの講義を担当され、著作としては「製図教科書」の基礎編と応用編がある。さらに、（社）日本室内装備設計士協会で京都支部副会長として活動をつづけておられます。推せん者宮之原武雄氏によれば、「学校卒業後は進んで教育と研究の仕事に専心し、木材工芸および室内設計に関して高度の見識の所持者であり、また、熊井七郎氏によれば、教育者として幾多の有為のインテリアデザイナーを世に送り、教鞭をとる傍ら近畿高校工芸連盟において活躍されインテリア教育界では貴重な存在である」と。

勤務先 京都市立伏見工業高等学校
京都市伏見区深草鈴塚町
電話 075-641-5121番

正会員（東京）^{おおひろ やすゆき}大広保行

（昭和18年9月30日生）

昭和41年3月佐賀大学の特美課程（工芸）卒業されたが、卒業にさきだち産業工芸試験所九州支所研究生として意匠研究に従事、卒業後は荒川家具（株）を経て小田急百貨店入社、現在小田急ハルク装工課勤務で、業績としては箱根乙女峠黒川紀章建築による「小田急イン乙女」インテリア設計その他がある。（社）日本店舗設計家協会会員。

なお、同氏は今般準会員から正会員に昇格されたものです。

勤務先 小田急ハルク装工課

東京都新宿区新宿

電話 03-342-1111番(3006)

正会員(東京) 細田京子

(昭和11年4月25日生)

昭和34年3月関東学院大学工学部建築学科卒業後レーモンド建築設計事務所において各種住宅のインテリアデザイン、家具デザインを担当、その後渡米、アイ・エム・ペイ建築事務所(ニューヨーク)においてニューヨークステイトユニバーシティの総合計画に参加、竹中工務店設計部、インテリアセンタースクール勤務を経て現在はフリー、作品としては「Hの住い」、「仕事を持つ独身者のアパート」その他がある。推せん者泉修二氏、三宅正郎氏によれば、渉外における実務経験、作品中の女性らしい細さを高く評価するとともに、建築家のご主人との協力による今後の活躍が期待されるとのこと。

勤務先 (自営)

東京都世田谷区世田谷3-

11-8 上町マンション1010

電話 03-429-8976番

準会員(名古屋) 池田高明

(昭和19年7月19日生)

昭和42年3月名古屋工業大学窯業工学科卒業、45年4月から東京デザイナー学院室内装飾科に在学中で、正会員松本政雄氏の松本制作室に所属しておられ、推せん者松本氏の嘱望される方である。中部支部の運営についても今後いろいろとお世話になる方です。

勤務先 松本制作室

名古屋市東区萱屋町2-16

電話 052-941-3045番

準会員(東京) 加藤 孝

(昭和19年9月16日生)

昭和42年桑沢デザイン研究所リビングデザイン科を卒業、フランスベッド(株)入社、研究部において意匠を担当し、45年8月来高島屋設計部において活躍中ですが、推せん者中井太一郎氏によれば、全くデザインの鬼門と感じられるベッド部門でよくこの仕事に耐えてきたものと感心し、健実なデザイナーとして推称されています。

勤務先 フランスベッド(株)

東京都昭島市中神町1148

電話 0425-43-3111番

準会員(東京) 宮藤すみれ

(昭和23年2月25日生)

広島市進徳女子高等学校卒業後、笠原貞男フローラルアートスクールフラワーデザイン師範科に昭和45年4月入

学、目下在学中で日本フラワーデザイナー協会および日本原色押花福祉協会それぞれの正会員である。ディスプレイ・インテリアに関係したフラワーデザインに力をそそぎ、フリーデザイナーとしてレストラン、家具店、洋服店等の店舗改装を経験しつつ、勉学をつづけている方です。

勤務先 フリー

東京都大田区大森北4-12

-19 堀口方

電話 03-582-4032番

準会員(北海道) 田阪春夫

(昭和19年3月1日生)

昭和40年北海道立職業訓練所卒業、川田木工(株)設計課に勤務し、その間46年に職業訓練大学(短期)を修了された。推せん者剣持仁氏によれば、量産工場における収納家具生産の長い経験を生かして現在はデザインの業務にたづさわっているが、インテリアデザインに対する熱意をもち、造形的な表現技術にも熟練しているので将来の成長が期待されるということです。

勤務先 川田木工(株)

北海道旭川市豊岡4条4丁目

(川田木工内)

電話 0166-32-3421番

なお、新入会員の御住所ならびに新賛助会員の紹介は紙面の都合で割愛せざるを得なくなりました。新賛助会員の紹介は次号を御覧下さい。

「お詫び」

46号巻頭の記事「ジャンボジェットのデザイン」の講演者氏名が、編集の不幸で落ちてしまいました。

諸氏は既にお気付きのことと思いますが、世にかくれもなき、正会員・剣持勇氏です。

此処にお詫びと訂正を致します。

● 編集後記

46年度発行の最終号をおとどけ致します。昨年は法人化2年目で、内外共に協会活動が飛躍せねばならない時期でしたが、印刷所の倒産ほかの為、年度初期に発行回数が不足したことをお詫びします。又、色々協力して下さい

た方々に紙上ですがお礼を申し上げます。

なお、総会終了後に新年度が始まりますが、一層充実した会報を作る為に会員諸氏の新たな編集参加及び積極的な投稿をお願い致します。